

大地信仰と互酬制に関して

岡本年正 (帝京大学)

キーワード： パチャママ、大地信仰、互酬制、負債、関係性

The Interrelations Between Earth Beliefs and Reciprocity in Cuzco, Perú

Toshimasa OKAMOTO (Teikyo University)

Keywords: Pachamama, Earth beliefs, reciprocity, debt, relationship

1. はじめに

本発表の目的は、これまでアンデス地域全般の信仰として普遍的に描かれてきた大地信仰が、互酬制の視点と地方都市クスコにおける現代的な文脈から分析されることで、複層的な状況にあることを明確にすることである。

これまでの分析により、大地信仰において最重要神格であり、大地と同義として認識されているパチャママは、それぞれの人の立場(個人的だけでなく周辺の環境も含む)によって異なる認識をされていることがわかってきた。

さまざまな立場からの複数の認識の仕方はあるが、人々とパチャママ(大地)の関係として共通している点は、人々は供物を捧げて請願する、そしてそれに対して何かしらの利益をパチャママから受け取っていると考える点である。ここにおいて、パチャママと様々な立場にある人々の関係それぞれを、アンデスに広くみられる互酬の視点から分析する。

2. 供物 (ofrenda = despacho) を介したパチャママと人々の関係：アンデス世界における互酬制

アンデス世界では、人々の生活の中に様々な互酬的關係が存在している。例えばアイニ(ayni)についてキャサリン・アレンは「生活はアイニの周りで回っている。何もタダではなされない。アイニにおいて、すべての行為は同等の反応を引き起こす」[Allen 2002:92]と述べている。アイニは基本的には社会的に同等の者同士で同等の労働を交換するものである。とはいえ、実際は相当程度の不平等を含むことも指摘されている

[Leinaweaver 2018:237]。またアイニとは異なり不均衡な人間関係を含み、労働に対して食事を提供するミンカ(mink'a)も良く知られている[Allen 2002:72-73]。

人々の間にある互酬的關係は、供物と大地の恵みを通して、アンデスの人々と大地あるいはパチャママにも敷衍されうる。人々と大地(パチャママ)の関係は、不均衡な互酬制といえる。自然の状況により農作物の収穫量や家畜の多産・不妊は左右され、常に大地から一定量の恵みを得られるわけではない。その一方、アンデスに生きる人々は、基本的には毎年同量の供物を捧げる。ここにおいて大地と共にある人々は、この互酬にどこまで期待しているのかわからない、むしろ期待しない互酬といえる。彼らは大地からの恵みを確実にするというよりも、その手前にある、大地との関係を続けるため、つまり共にあり続けるために供物を捧げているといえる。

一方、大地との関係を直接的に持たず、市場経済的な意味でパチャママと互酬的な関係を持つ人々もいる。むしろ彼らが、現在の都市部も含めてパチャママ信仰を活性化させている。

彼らとパチャママの間の供物は、貨幣の比喻のような形として存在する。人々はパチャママに対し、即自的かつ平等的な交換を求めている。その結果、彼らの備える供物は大きくなり、供物そのものの値段も膨らんでいっている。供物の量が増えるのは、一つ一つの要素が増えているだけでなく、新たな要素も加わってきているためである。それらはやみくもに増えているわけではなく、パチャママが好むと思われるものが加えられている。この点においては、大地と直接

かかわらない人々も、パチャママを主体としてとらえているだろう。

一方で、彼らの関係性の形は個人対パチャママであり 2 者関係で閉じてしまう。アンデスで生きるということが、パチャママと共にあり続けることであるならば、2 者関係ではなく、少なくとも時間を含めた、世代を超えた人々とパチャママの関係でなくてはならない。その意味で、大地と直接かかわる人々とそうでない人々のパチャママとの関係は異なっており、同じような互酬という関係ではない。

3. 互酬制を超えて：関係の継続から

大地とかかわる人々は、大地と互酬による関係ではなく、関係がそもそもあり、その関係の継続のため、互酬のような形式をとっているのではないか。この点を、負債から分析することで、互酬という形式の目的が単に大地の恵み、もしくはパチャママに願いをかなえてもらうこと以前に、パチャママとの関係を維持することが目指されていることを考察する。

この関係性という観点から論じるため、負債が人々とパチャママの関係を捉える視点となりうる。負債を積極的に捉える視点は、グレーバーや、グレーバーをもとに、関係性の継続や時間の問題を含めた負債についての議論が参考となる [Cf. グレーバー 2016, 佐久間他 2023]。

パチャママへの供物に関し Mannheim は「山の神々への儀礼の供物は、肥沃な土地と家畜の反対給付への要求であるマニヤイ (*mañay*) がしばしば伴われている」と述べる。マニヤイは、反対給付を遅れて受け取る給付であるとしている [Mannheim 1986:268]。遅れることにより、負債が発生し関係の継続が考えられる。また、そもそもここでの給付と反対給付の大きさの均衡は、計ることはできない。マニヤイが、請願の他に祈るという計りえないことも意味していることから、パチャママとの関係性は、即自的かつ均衡のある関係とは考えにくい。つまりは常に負債を作り続ける関係であるともいえる。

一方で、先述のように大地と直接かかわりのない人々とパチャママの関係は、即自的かつ彼

らの考える均衡の上（供物を大きくすれば大きな願いも叶う）に成立しており、負債を発生させない（感じない）仕組みといえる。

しかしながら彼らの中には、パチャママに対する供物をパゴ（スペイン語で支払いの意）と呼びつつも、「支払い」ではなく「感謝」であると説明する人は多い。ここには、交換だけでない関係性も常に存在しており、交換か互酬かといった二者択一の世界が存在しているわけではない。

4. おわりに

パチャママに供物を行うことは、大地と直接関係を持つか持たないかにより、その性質が異なっている。一方で交換的であり、他方でより贈与的な互酬制の関係が存在している。それらの混交状況が都市、そして都市に生きる人々の中に存在していることが明らかとなった。また、パチャママと人々の関係が伝統や慣習として、つまり世代を超えてつながり続けるために供物があり、サルトゥー＝ラジュが述べる「借りの正の側面」[サルトゥー＝ラジュ 2014:209-211] がそこには存在している。

【主要参考文献】

Allen, Catherine J., 2002, *The Hold Life Has: Coca and Cultural Identity in an Andean Community* (2nd edition). Smithsonian Institution Press, Washington D.C.

グレーバー、デヴィッド、2016、『負債論：負債と暴力の 5000 年』、以文社。

Leinaweaver, Jessaca B., 2018, Kinship, Households, and Sociality. In *The Andean World*, edited by Linda J. Seligmann, and Kathleen S. Fine-Dare, pp.235-248, Routledge, Abingdon, Oxon. DOI: <https://doi.org/10.4324/9781315621715>

Mannheim, Bruce, 1986, The Language of Reciprocity in Southern Peruvian Quechua. *Anthropological Linguistics*, 28(3):267-273.

佐久間寛他編著、2023、『負債と信用の人類学：人間経済の現在』、以文社。

サルトゥー＝ラジュ、ナタリー、2014、『借りの哲学』、太田出版。